

# ピア・サポートの可能性

土屋 貴之

(法政大学学生センター)

同じ立場の仲間による支援、ピア・サポート。近年、この言葉をよく目にする。

本学では二〇〇〇年に開始した新入生合宿をはじめ、オープンキャンパスなどで「学生スタッフ」が定着し、「学生が学生を支援する」「支援を受けた学生が支援する側に転化していく」という、ピア・サポートの土壌が築かれてきた。新たな学生支援の在り方を模索する中でも、この「学生力」は欠かせない要素であると確信し、二〇〇七年度・文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援GP）」に、「『学生の力』を活かした学生支援体制の構築」クラス・ゼミ（正課教育）、クラブ・サークル（正課外教育）に次ぐ『第三のコミュニティ

イ』づくり」でエントリーし、採択されるに至った。

学生支援GP最終年度を迎え、本事業Host PSC（ピア・サポートコミュニティ）の経過報告をするとともに、ピア・サポートの可能性について述べたい。

## 1. PSCの必要性

（1）「法政大学学生生活実態調査」から見えてきたこと

本学に在籍する約三万人の学部生から一万人を無作為に抽出、調査する「法政大学学生生活実態調査」（学生支援GP申請時は二〇〇三年度データ参照。回答者四三三六六人。二〇〇七年度から毎年実施）によると、「学生生活上の悩み・不安がありますか？」という問いに「ある」との

回答が六八・五%だった。その内容は多いものから「進路・就職」「成績・単位」「性格・能力」「友人・異性関係」「進級・卒業」で、現代の学生が抱える悩み・不安がいかに多様であるかを改めて知ることとなった。

教職員にとって衝撃的なのは次の結果である。「誰に相談しましたか？」への回答が「先輩・友人」(五五・七%)、「両親」(三三・五%) に対して、「教職員」(二・五%)、「学生相談室」(一・六%) と大きな開きが見られたことだ。とりわけ学生相談室には精神科医師や心理カウンセラーなどの専門家を配備しているにも関わらず、である。学生は悩み・不安の解決を大学に頼らず、友人をはじめとした、より身近で、気軽に相談できる「隣人」に求めていることが浮き彫りとなった。また、「サークル活動に参加していますか？」には五一・四%が「参加していない」と答えた。

以上から学生の居場所としてのコミュニティ、悩みや不安の解決の場としてのコミュニティを創出することは今後の学生支援に有効な手段である、との結論に達した。それを具現化したものが Hosei PSC である。

## (2) Hosei PSC のしくみ

### ① PSC サイクルをつくる

支援を受けた学生が支援する側に転化していくことで、

PSC サイクルが創出されると考えている。

事実、新入生合宿などの先例を見ると、支援を受けた学生は「学生スタッフ」に一種の憧れを抱くようだ。「進行がうまい」「話がわかりやすい」「相談しやすい」「同世代の学生が大人に見える」など感想は様々だが、一様に「先輩のようになって後輩をサポートしたい」と学生スタッフにエントリーするのである。本事業においても、この好循環「PSC サイクル」の構築を各プロジェクト活動の共通目的として設定した。

### ② 第三のコミュニティを担う

既存のコミュニティでは包含できない学生も取り込むことが可能な、新たなコミュニティとしての役割を担う。

「ゼミにもサークルにも所属していない」「既存のコミュニティに馴染めない」「新たな活動の場を探している」など「第三のコミュニティ」を求める学生の背景は様々だが、いつでも新たなスタートがされるよう、受入体制を整えている。

### ③ 社会人基礎力を養成する

プロジェクト活動では、常に教職員との協働体制が組み立てられている。その結果、企画から運営まで社会人レベルでの活動を行う中で、社会人基礎力を身につけることが可能と

なる。

経済産業省は「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」を「社会人基礎力」と表現し、三つの能力（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）のもと、実行力、課題発見力、傾聴力など二二の能力要素を提唱している。教職員との協働、すなわち「学内インターンシップ」とも言える本事業に携わること、実社会を体験し、力をつける。

## 2. 「ピア・サポート」を実現する七プロジェクト

本事業を進める上で、学生と大学が協働してプロジェクトを展開している。二〇〇九年度は、九六プログラム実施し、延べ約一万人の学生を巻き込んだ。その進捗状況は、学生センター教職員、関連部局管理職、各プロジェクト担当職員・学生スタッフ代表者、外部専門家で構成される月一回の「PSC運営委員会」で、情報共有し、軌道修正しながら進めている。

### (1) 自己啓発領域

#### ①エンパワーメントプロジェクト

学生が成長するための支援策を検討し、プログラムを実行するプロジェクト。PSC運営委員会における意見や各

プロジェクトでの議論を参考にプログラムをつくる。

一例を挙げると、「ワンデーセミナー（コミュニケーショントレーニング）」「アサーショントレーニング」「ファシリテーション入門講座」「コーチング入門講座」といった、ピア・サポート活動をする上で学生スタッフが身につけておくべきスキルの向上を図ったものから、「表現力を豊かにする話し方講座」「マインドマップ講座」「ロジカル・ライティング講座」「よしもと流「発想法」講座」など、より細分化した個別のスキルアップを図るものまで様々である。活動の中で必要とするスキルを学生自身が考え、プログラム化し、受講する、という「スタッフ研修」の役割も兼ねている。

#### ②ピア・サポートプロジェクト

How.PSCの根幹をなすプロジェクトであるが、本事業では七つのプロジェクトを総称して「ピア・サポートコミュニティ」と呼んでいるため、いわゆる「ピア活動」に特化している。

主な取り組みに「新入生サポーター」がある。これは研修を受けた上級生が、入学して間もない新入生からの学生生活に関する質問に答え、悩み・不安の解消を図るものである。ニーズの多い入学後の約二週間にわたって実施し、

新入生が大学生活に溶け込めるよう後押ししている。

また、「校歌を覚えよう」も好評である。これは前述の調査「法政大学校歌を歌えますか？」という問いに約七割（二〇〇七年度データ）が「いいえ」と回答したことを受けて、二〇〇八年度から実施したものである。応援団による力強い校歌をはじめ、ジャズ研究会によるジャズ風校歌、三曲会による尺八演奏の和風校歌など、学内団体がアレンジして日替わりで演奏する。学生が校歌と自然に接する機会を増やし、校歌の認知度を高めていく試みである。

## (2) 社会貢献領域

### ③障がい学生支援プロジェクト

本学の障がい学生支援体制は、長年の検討課題であった。二〇〇七年一〇月に発足した障がい学生支援室設置準備室（二〇〇八年四月に「障がい学生支援室」開設）とともに、障がい学生の講義保障、学生生活保障、サポーターの確保、学生の啓発活動などに取り組んでいる。

具体的には「ノートテイク講座」「パソコンテイク講座」「手話講座」の実施、ノートテイカーの確保という講義保障に関わる取り組みのほか、視覚障がい者への理解を深める目的で「ダイアログ・イン・ザ・ダーク体験」を実施した。

また、支援体制やルールを明文化し、聴覚障がい学生と支援学生、支援室が共通認識を持つて取り組むための『聴覚障がい学生支援ハンドブック』を作成した。製作作業は日頃の活動を再確認することになり、支援学生のスキルアップにもつながった。

### ④ボランティア支援プロジェクト（VSP）

全学的なボランティアセンターの設立を目指してスタートした。市ヶ谷ではボランティアサークル間の連携づくり、多摩ではボランティアセンターの構想固め、というようにキャンパスによる着手点の違いはあるものの、本プロジェクトの稼働によりキャンパス横断のボランティアネットワークが生まれた。そして、二〇〇九年四月に「ボランティアセンター」が開設された。

主な取り組みに、ボランティアサークルを一堂に集め、様々なジャンルのボランティアを紹介する「春のボランティア WEEK」、「富士山清掃ボランティア」「林業体験ボランティア」「夕張まちづくりボランティア」といった基幹プロジェクト、「九段・靖国通り清掃ボランティア」「キャンパス周辺清掃ボランティア」といった地域貢献プロジェクトがある。

(3) キャリア支援領域

⑤ キャリア支援プロジェクト

キャリアプランニングや就職活動支援に際して、学生の声とりわけ内定を得た上級生の体験・意見を活かそうというプロジェクト。

三年生の就職活動が本格化する一〇月から自身の卒業する三月まで、研修を受けた学生がキャリアセンターに常駐し、下級生の相談に応じる「キャリアサポーター」が主な活動であるが、他にも「OB・OG交流会」「業界研究相談会」「自己分析ワーク」「エントリーシート対策講座」「グループディスカッション対策講座」「面接対策講座」などの就職支援イベントを実施している。

(4) キャンパスライフ向上領域

⑥ 同郷会プロジェクト

コミュニケーションとしての「同郷会」設立を目指すプロジェクト。入学して間もない新入生が、まず入りやすいコミュニケーションは同郷会であると考え、その中で先に上京した先輩が後輩を支援する、同郷出身者同士で支え合う、サポートが生まれることを期待している。

春には「同郷会相談ブース」を開設し、学生生活や一人暮らしに関する質問に応じるほか、一人暮らしをする上で

必要な情報を掲載した冊子『How to 一人暮らし』を発行している。また、キャリアセンターと連携し、Uターン希望者からの質問に地方での就職を決めた上級生が応じる「Uターン応援！相談会」を実施するなど、入口から出口まで一貫して地方出身学生のサポートにあたっている。

⑦ 課外教養プログラムプロジェクト (KYOPRO)

正課教育を補完する「課外教養プログラム」の企画・運営を担うプロジェクト。一九九三年に開始して以来、硬化した課外教養プログラムの活性化を図るため、「正課外教育」「地域貢献」「帰属意識高揚」などのコンセプトのもと、プログラムの企画・運営に取り組んでいる。学生スタッフはニーズと効果を考慮してプログラムを企画し、対外交渉までも行う。また、企画するだけでなく、当日は参加学生のサポートに徹する。

学生スタッフの影響は大きく、課外教養プログラムへの参加者は年々増加しており、二〇〇九年度は延べ約七六〇〇名が参加した。主な取り組みに「大学生の社会科学見学」「大学生なら知っておきたい基礎教養講座」「大学生が考える薬物乱用防止の取り組み」などのシリーズがある。

### 3. PSSCの効果

課外教養プログラムプロジェクトを例に、本事業の効果について検証する。

(1) 「PSSCサイクル」による循環型コミュニティは生み出したのか？

学生スタッフのきめ細かい対応が功を奏し、プログラムを実施するごとに「スタッフになってサポートしたい」という反響があった。また、学生が当日の運営を担う点について、参加者から「親しみやすい」「気軽に質問できる」といった感想が聞かれ、学生が関わることのメリットが十分に発揮できた。

新入生合宿などの先例に続き、支援を受けた学生が支援する側に転化していく、ピア・サポートの好循環が構築できたと言える。

(2) 「第三のコミュニティ」としての役割を果たしているか？

「他キャンパスの学生と触れ合えて刺激になる」「希望ゼミに落ちたのでKYOPROに打ち込みたい」「編入学でゼミやサークルに入っていない。出遅れ感を払拭したい」ー加入動機は様々だが、これらを見ても「第三のコミュニティ

イ」として十分に機能していると言える。

また、学生支援GP採択から三期の卒業生を輩出したが、卒業後もKYOPROの運営に関して現役生の相談に応じてくれている点は特筆に値する。ピア・サポートのコンセプトを十分に理解しているからこそできる、真のサポートだと言える。

(3) 「社会人基礎力」は身についたのか？

KYOPROの活動は、身近な問題の発掘↓調査↓交渉↓実施↓フィードバックの繰り返しで、常に「実践」の連続である。その結果、学生の成長には目を見張るものがあった。この四年間、大半のスタッフが志望企業、志望業界に進路を決定したが、その一因となっていることを願いたい。

また、担当職員にとっても本事業は有益である。学生の成長・発達を願い、支援策を自ら考えて、実行する。まさにSD（職員の能力開発）と直結する取り組みだと言える。

### 4. ピア・サポートの可能性

他者を支援するには、自身に足りない力を補う必要がある。他者のために動くことが、結果として自己成長につながる。

がっている。本事業を通じて支援する側、支援される側、双方に教育的効果が見られ、ピア・サポートの発展性・可能性を改めて実感することとなった。

学生スタッフからは「ピア・サポートに関わって大学生活が楽しくなった」との感想が多数聞かれたが、それだけでも成功だと言うことができる。更に驚くべきは、学生スタッフから正課教育へのサポートの提案があったことである。「大学生なら知っておきたい基礎教養講座」では、数学や心理学といった正課教育で行われている科目について、学生提案のプログラムが実施された。自分が学ぶ専門分野を他学部の学生サポートに活かしたいなどの声があり、今後正課教育においてもピア・サポートの可能性は計り知れない。

学生の可能性が無限である分、ピア・サポートの可能性も無限である。今後も学生の力を最大限に活かす仕組みを模索しながら、法政大学らしい「ピア・サポート」を展開していきたいと思っている。